

カナダ留学顛末記

高橋正光

(株)神戸製鋼所 鉄鋼技術研究所

見送りに来てくれた弟夫婦たちに別れを告げて、かっこよく乗り込んだ飛行機が成田を飛び立たない。エンジントラブルだという。機外との連絡も取られないまま、二時間以上かんづめにされたあげく、乗り換えた。しかも、トロント直行便からバンクーバー経由便へ。やれやれ、なんて始まりだろう。弟夫婦も飛ばない飛行機に愛想を尽かし、すでに帰ってしまった…。

乗り換えた飛行機は無事にバンクーバーまで到着した。しかも、隣の席は若い女の子で幸運だった。彼女もトロントまで行くそう。バンクーバーでトロント行きの便に乗り換える。ところが、予定外の大勢のトロント行きの乗客を空席に割り当てるものだから、カウンターは大混乱。「順番に手続きしておりますから、座ってお待ちください」という指示に正直に従って、カウンターに詰め寄っている人達を横目におとなしく座って待っていたら、一本後の便にまわされた。なんてことだ。自己主張が足りなかったか。「正直者が馬鹿を見る」

結局、トロントへは予定時刻より七時間半も遅れて到着した。空港にはトロント大学留学中の、熊本大学の小塚先生と新日鐵の木村さんが迎えに来てくださっていた。バンクーバーで航空会社の人をお願いした到着遅延を伝えるメッセージは伝わっていなかったようで、お二人はずいぶん慌てられたらしい。そこへ行方不明の私が、機内で仲良くなった隣席の女の子と一緒に現れたので蟹蟹を買ってしまった。結局このお二人にはその後の一年間、ずっとご面倒をおかけすることになった。私のトロント大学留学はこのようなどんでもない始まり方をした。

到着してから十日ぐらいの間に住居を決めて、電話を引いたり、銀行口座を開いたりした。トロントでは五月になると夜の九時ぐらいまで外が明るい。不動産屋は五時に閉まってしまうので、その後の長い時間に毎日街を徘徊した。トロントの街はとてもきれいで治安も良い。アメリカのダウンタウンで、こんなに警戒心もなく歩ける街はないのではないだろうか。カナダでは日本同様、銃の所持が禁止されており、凶悪犯罪や麻薬等の社会問題ではアメリカを反面教師にしていると感じた。それでも、殺人事件は一年で倍増しており、年々悪くなっているようだ。街を歩くと、いろいろなことがわかる。「足を踏み入れない方がよい領域」は雰囲気でもわかるようになるし、毛深い男たちが抱きあっていたり、ひとりひとりが異なる格好をしていたりして、個人や個性が大切にされていることもわかる。

ハンバーガーショップでは、何を挟むかにまで自分の好みを反映させなければならない。

五月の中旬になって生活も落ち着き、ようやく毎日大学へ通えるようになった。大学には地下鉄で通ったが、停車駅のアナウンスもなにもない。これ以外にも、生活を始めてから、日本のサービスと比べるとずいぶん不親切だなと思うことが少なくなかった。しかし、慣れてしまうと逆に、日本のサービスが過剰である気がしてくる。列車(特に新幹線)のアナウンスは必要以上に多いし、たとえば、ガソリンスタンドで一台の車に何人ものサービスマンが群がったり、プレゼントをくれたり、ショッピングセンターの駐車場で、自動発券機からわざわざ駐車券を抜いて渡してくれる人がいたり。以前はあまり気にしなかったが、帰国してからは、これらの人件費やプレゼント代を削減して、料金を安くすればよいのになと思うようになった。

トロント大学はトロントのダウンタウンの真ん中にある。歴史的な石の建築物と近代的なビルが同居する美しいキャンパスである。夏には咲き乱れる花や芝生の緑が美しい。冬が寒く長いせいか、夏のキャンパスは特にいきいきとしている。もちろん、これはキャンパスに限ったことではないが。六月になって、陽射しが強くなると、皆早くもバカンスのことを考え始める。学生はローラスケートや自転車を通ったり、キャンパスの隅でバーベキューをしたりしている。

研究室を日本の大学のそれと比較すると、特に鉄冶金のグループにおいて実験装置や器具が貧弱であると感じた。一番の原因はお金がないからだ。北米の鉄鋼業の冷え込みで、鉄鋼メーカーからの研究助成金が最近停止されたそう。学生間での鉄鋼業の人気も落ち込んでしまったらしい。もうひとつ感じたのは、整理整頓が悪いということだ。何年も前の人が行なった実験試料がキャビネットの中に放ったままにしてあるし、実験や分析の後片付けがされていないことが多い。

しかし、学生は非常によく勉強する。アルバイトに忙しくて授業を受けないなどということは考えられないことだ。特に感心したのは、めりはりがしっかりしていることである。研究の進捗が思わしくない時でも、「こういう時こそ気分転換が必要だ」とよく運動をする。運動の後研究室に戻ってきて、夜遅くまでまた勉強するのである。もちろん、教授陣の評価も厳しいようで、成績が悪ければ容赦なく単位を落とされ、退学処分となるので試験前の勉強は必死で

ある。一方、必要もなく大学に長くいることもしない。時には三時くらいに帰ってしまうこともあるし、大学に来ない日もある。研究の進捗も学生による自己管理に任されているのである。したがって、修士論文の発表時期はまちまちである。私も一年間、指導教授であるMcLean教授やSomerville教授の方から「研究の進捗状況について聞かせてほしい」と言われたことはなかったと思う。すべて自分の方から働きかけなければならなかった。

研究活動の中で、実験だけはトロント郊外にある半官半民の研究機関、Ortech Internationalで行なうことになった。これはとてもありがたかった。というのは、ビジネスライクに実験が進められたし、ものの調達が手際よく行なえたからである。実験は技術職の人が行なってくれた。最初は週に一日一回の割合であったが、慣れるに従い、週に二日や一日に二回の実験を要求した。はじめはしぶっていたが、四月の北米の学会に発表する予定でいたので、それを理由に頼み込み、実施してもらった。

日本にいと、欧米の人達が一所懸命働いていないという誤解を抱きがちである。なにしろ一国の総理大臣までがそのような発言をするくらいである。もちろん個人差はあるが、私の印象では前述したように、彼らは勤勉で、仕事の密度という点では日本人よりも高いのではないかとさえ感じる。毎日の仕事の仕方をランニングに例えるならば、欧米人の働き方は短距離の全力疾走であり、日本人のそれはマラソンであるという気がする。しかも、日本では十の仕事を十二して、はじめて評価されるような風潮があるのではないだろうか。

働き方というか、社会の考え方には大きな違いがある。彼らにとって、もっとも大切なものは個人であり、私的な生活である。そのために自己主張を強くするし、お互いの個性を尊重し合って調和を図ろうとしている。日本では、まず集団としての調和があって、その調和に個人が合せている気がする。数年前、プロ野球の外人選手が息子の病気の治療のためにシーズン途中で帰国し、チームを離れたことで球団から解雇されたことがあった。このとき、マスコミの口調は仕事をはなれた外人選手に対して批判的であったが、欧米人にしてみれば、きっとこのような批判こそ理解できないだろう。一方で、公共の交通機関(地下鉄やバス)や郵便が二週間も完全ストライキを実施しても、「利用者不在だ」と文句をいう私に対して、「彼らだって同じ労働者だ。ストライキの権利を有している」という答えが返ってくる。これなどは公共性等によらず、労働者の立場を尊重しているということなのだろう。

日本はいまや押しも押されぬ経済大国であり、世界最高の外貨獲得国であるためにとても関心を持たれ、注目されている。しかし、前述のような考え方や文化の違いにもとづく誤解は、年々大きくなっている気がする。このような誤解を解くためにも、周囲の質問に丁寧に答え、相互理解

を深めることも、海外で生活する日本人の重要な役目であると思う。たとえば、「石油をほぼ100%輸入に依存しているながら、なぜ日本は湾岸戦争に人を派遣しなかったのか」「どのような仕組で、宮沢政権が発足したのか」「現在の日米の貿易関係をどう思っているのか」等のすぐには答えにくい質問を、彼らは単刀直入に訊ねてくる。だが、これらの質問にちゃんと答えていかなくては、日本は彼らにとっていつまでたっても理解できない「不思議の国」でしかないだろう。

留学期間はほんの一年間であつたので、少しでも多くのカナダ人と接したいと思っていたが、その点では七月にやってきた妻が大活躍してくれた。最初は、ほとんど英語も話せないのに、どのように暮らすのか心配していたが、移民用英会話教室、カナディアンクラフト教室や料理教室に通って友達を作り始めたのである。カナダでは公共の教育センターが、ほとんど教材費のみの値段でこれらの教室を開講している。また、アパートの住民によるパーティーにも参加し、ご近所のおじいちゃん、おばあちゃんたちともとても仲良くなった。(なぜかこうしたパーティーに参加しているのはお年寄りたちばかりであつた)なにしろ私は、アパートの中では「Keiko's(妻の名前)Husband」でしかなかった。おかげで、家庭によく招待したり、されたりできた。パーティーといっても特に御馳走をするわけでもなく、ただお茶を飲んで話をしたりすることが多かった。

はじめて我が家で日本茶を出した時には、その色を見て「おしっこのようだ」と言われ、大騒ぎになった。次に一口飲んで、「砂糖がほしい」と言う。「紅茶にだって入れて飲む」と言われれば、なるほど道理である。

周りの人たちの中には、初めて接した日本人が私たちだった人もいた。その人たちに、「あなたたちと接して、日本人が前より好きになった」と言われてとても嬉しかった。

三月、学会目前になって発表原稿の締切が近づいても、確信のもてる結果が得られていなかった。結局、追加実験にさらに追加を重ね、ブリザードで大学が休校の日でもOrtechへ実験をしに出かけた。最後の実験の分析結果を待ちながら推定結果で原稿は書いたのだが、出てきた結果は期待を裏切るものだった。一晩で結果と考察の部分を慌てて書き直し、宅急便で協会に送った。これで、どうにか一年の仕事をもとめることができた。

異文化と接した一年間のトロントでの生活は、毎日が新鮮で、とてもおもしろかった。めりはりのある仕事の仕方、海外の人たちの日本を見る目、私たちとはずいぶん異なる考え方、自己表現のたいせつさ、日本の良さ等、多くのことを学べたと思う。この貴重な経験を、今後の仕事や生活に活かしてゆきたいとつくづく思う。

去り難い思いの私たちを乗せた飛行機は、今度は定刻通りに成田に着いた。

(平成4年12月10日受付)